



Title	生きるよろこびを : 心の垢を洗う「大阪ことば」をつくりたい
Author(s)	秋田, 実
Citation	大阪公衆衛生. 1970, 24, p. 3-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/84344">https://hdl.handle.net/11094/84344</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 生きるよろこびを

一心の垢を洗う「大阪ことば」をつくりたい

秋 田 実



## 道頓堀川で フナを釣る

大阪で生まれ、大阪で育ちずっと今日まで大阪で暮らしてまいりました。年言うのいやなんですけども、65か6ら

しい。(笑声)もう大阪でずいぶん長く古く楽しく生活してきております。60年くらい昔、わたしら子供の時分の大阪っていうのはいまとは全然想像できないくらいでした。あの道頓堀川、いまの道頓堀川、あの川でわたしらフナを釣って遊んだもんで、いまの若い方に話すと、だれも信用してくれませんが、事実そうだったし、それからわたしども小さい時分にはあの道頓堀川で夏なんか泳いだもんでですけども、こういうふうの思い出ってのは、いま思い出して自分でも信用できないくらい、まあその時分の大阪ってのはある意味ではのどかだったんじゃないかと思えます。

私なんかそういう意味で大阪で育ち、後には縁あって漫才の仕事を手伝いだすようになりまして、40年漫才の仕事を手伝ってきておりますが、漫才はご承知のように実は舞台の上の創作じゃなしに、大阪の生活、大阪人が日常話し合ってることば、生活、そういうものを実は舞台に移しておりますわけで、大阪の移り変わりってものをわたしどもときどきふっと自分の仕事を振り返りまして、大阪もずいぶんその意味で変わってきたなあとと思うわけでございます。そういう違い昔から大阪にあったもので現在なくなってしまったもの乞食ってのがございます。

わたしら子供の時分からある時代までは、大阪中どこへ行っても必ず乞食が橋のたもとになりどっかにすわっておりまして物ぐいをいたしておりました。乞食ってものがわたしどもの大阪の町と切り離せない、それほどなじみの深いもので、日常生活にも乞食ってことばが実によく使われておりました。たとえば何かの場

合には、ゝあいつは乞食腹や、何食うてもあたらんゝと。(笑声)そういうふうな乞食腹っていうのが一番はっきりおもしろくわかる言い方、言い回して、ゝあいつは乞食腹や、何食うてもあたらんゝと、ゝ乞食の腹も入るだけやゝと、何かそういう乞食ってことばがずいぶんいろいろ使われております。ゝあの人には乞食のシラミや、口で人を殺しはるゝと。(笑声)まあそういうふうないろいろ使われます。あの場合にはゝ乞食3日したらやめられんゝとか、また何かの場合にはゝあいつは乞食みたいなやっちゃ、根性がいやらしい、いやしいゝと。

わたしら子供の時分には即席英語っていいですか、その英語で乞食のことをどない言うねん、ゝワンダースゝと。乞食おわん出しますから、(笑声)それでワンダースと。

## 商いは笑いである

大体大阪ではご承知のように昔からゝ商(アキナイ)は笑いであるゝとそういうことが言われてきております。ゝ商いは笑いであるゝと。これを音で読みましてゝ商(ショウ)は笑(ショウ)なりゝと、何よりも相ともににここに笑いながら話を進めていく、これが商売の上で一番大事な精神である。そういう意味で大阪のことばってものはできてきております。

大阪のことばは本来笑うことば、笑いながらスムーズに話を推し進めていくことば、そういうことばが日常生活で生かされてる。その日常生活の中で一番われわれになじみ深いものが絶えずいつでもそういうふうな、モダン語、流行語、そんな形で日常生活の中に出てくる。乞食もそういう意味で代表的なその一つで、そういう乞食がたとえられておりますが、その乞食にしても相手をおこらさないで笑いのうちに自分の思うことを相手にわからせる、そういうことをそのころはやっておりました。

焼き場なんかへ参りますと、入口に乞食が全部すわ

ってあって、そして焼き場へ来る人たちに物ごいをして  
おる。とときどきはいつもすわっておるし、何べん  
も来てやってるから、もうやるのがじゃまくさいん  
で、施し銭しないで焼き場中へ入ってしまう。と乞  
食はジーンとそれを見ておまして、今度その人たちが  
帰ってくる。そういうときには乞食はニコニコと笑  
い顔で丁寧に頭を下げてその人たちに「どうぞお近い  
うちに」と（笑声）。場所が悪いわけなんです。しゃ  
くにさわるが舌打ちしながら、やっぱりにが笑いで  
一銭施し銭をする。

最近、去年でしたか私、道頓堀のマージャンクラブ  
をのぞきましたら、大学生がマージャンしてる。その  
学生が何かのときに4人でやってるときに、「あわて  
る乞食はもらいが少ない」と、そう言ってゲラゲラ  
笑ってるんで、わたしの知ってる大学生なんで、「君  
らそのことばどこで覚えたんや」と。「うちでおばあ  
さんがいつも言うてるんで、ほんで使うてまんねん」  
と。「おもしろいか」と言うたら、「ええ、おもしろま  
なあ」と。そういういま乞食がいなくなりましたが、  
そういう具体的な生きたことば、生きたたとえても  
のはやはり日常生活に生きている。そのように言える  
んじゃないかと思えます。そういう「商は笑なり」の  
精神の上に立って、できるだけ日常生活の中でわれわ  
れがなじみ深いことば、言い回し、そういうものが生  
活の中で生きております。

いまでは次第に生活がよくなり、世の中がよくな  
って、こういったような種類のことばってのは消えてお  
りますが、過去にさかのぼるほどそういうことばが生  
きている。

そういう意味でわたしも振り返ってみますと、こ

れまでに一番よく使われてることばの種類の一つ、そ  
ういうものでは、おうちの中で生活している一番なじ  
み深い場所ってのはどこかって言えば便所で、便所を  
たとえにしたことばってのはずいぶんよくございま  
す。漫才の舞台だけじゃなしに日常生活の中でもそう  
いうきたないことばがたとえに使われております。た  
とえば便所の窓から見る月、<sup>ミ</sup>これがほんとのウツの  
つきや<sup>ミ</sup>と（爆笑）。何かのときには「便所の火事で  
ヤケクソや<sup>ミ</sup>と（笑声）。まあいろいろ便所ってもの  
が非常になつかしい心やすい場所なんで、便所がいろ  
いろ使われております。イロハかるたなんかに「<sup>ミ</sup>疝  
氣（戦地）でマンジュウ、くそうてもうまい<sup>ミ</sup>（笑声）  
とか、そういうたとえに使われてるように、便所が絶  
えずそういうふうに使われておる。

## 一日一度は高野山参り

たとえばこれは感心しない、いいことばではござい  
ませんけども、大阪では庶民の間でつい最近まではよく  
使われましたことば、言い回しに、何かの場合に  
<sup>ミ</sup>あいつにお説教してもあんなやつに何言うてもこた  
えるかい<sup>ミ</sup>と、そういうふうにくたえないというとき  
に大阪では庶民の間で「<sup>ミ</sup>パパ買いにへ<sup>ミ</sup>ていう、そう  
いうことばがずっと言われておりました（爆笑）わた  
しら子供の時分から、おとなたちが何でもないときに  
いつも言うてることばで、一番なじみのあることばで  
<sup>ミ</sup>パパ買いにへ<sup>ミ</sup>と。肥くみ屋のことなんです。肥く  
み屋が肥くみに来てくれる。そのときにそのそばでお  
なら落しても肥くみ屋は何ともない、くさくもない、  
もっとくさいこと扱てるから（笑声）。

大阪では昔から便所のことを「<sup>ミ</sup>コーヤサン<sup>ミ</sup>」（高野





山)と、そのように言います。何でもないことですが、大阪だけでは高野山と言ってる。なぜ高野山と言うかといいますと、まあ使ってる、あるいは知ってるお方でもご存じないと思いますけども、大阪では昔から日常生活で一生の念願として、一生の間にお伊勢さんへ一度、お参りしたい、あるいは熊野へもお参りしたい、それから高野山にもお参りしたい。これがまあ大阪の庶民の願いで、そしてその高野山ではお芝居あるいは石童丸とかあいうもので一番なじみのある場所で、その高野山に便所をなぞらえたんで、どうなぞらえたかと申しますと、高野山へ行きますとあいうかるかや石童丸にしましても、みんな向こうで剃髪する。そのみなが一番よく知ってるその方と結びつけて、便所は高野山、高野山はどういうところか、髪落とすところだ、で高野山、便所、紙落とすところと(笑声)。

もとはといえば、ご承知のように便所ってのは初めはかわやであり、川の上につくってあった。それがコーヤになり、それが大阪では高野山になった。すると便所っていうそういうきたない場所ですけども、何かの場合座敷でだれかが話てる、そういうときに立ち上がる、「どこへ行きはんの」と聞いたら、「ちょっと高野山へ」と。すると「ごゆっくりお参りを」と(爆笑)。するとあの便所へ行く何でもないそういうことでも家中に笑いが漂う。

そんなふうに関今まで大阪ではことばってのが生かし使われてきてるっていいですか、そういう便所なんかにしても現在ではほとんどが水洗便所に次第に変わってきており、そういうことばも次第に消え死んでいっております。

それにかわりましてご承知のように昭和の初めごろには「トイレ」ってことばが出てき、いまの百貨店その他でもきれいな便所、さっと水が流れる便所ができるようになりましたが、そういう「トイレ」ってなことばがで始めたころ、わたしらにまだに覚えて

おり、その本人もおりますが、宗右衛門町の若い芸者、その芸者のエピソードがいまでも「トイレ芸者」ってんで、もう70幾つになってまだ生きておりますけども、そういう芸者さんがおりました。

## トイレ芸者のこと

これが名前の起こりってのはその当時、トイレってことばがでかけの頃に、ある会社へ社長さんに集金に行って、受付で面会求めましたら、受付の女の人が「社長さんちょっといま席は空いておられます」と。「社長さんどこへ行かれたんですか」と言ったら、しかたない、受付の女の子が笑いながら「社長さんトイレへ行ってもらえます」と。するとその若い芸者がトイレってことばまだ知らないんで、「トイレへ行ってはんのやったら、そらとてやないが帰ってけえん、また今度にします」と(笑声)。「すぐお帰りになります」と言うのを、「いやけこです、また今度にします」と帰って行って、ほんでそのあくる日に往来で偶然ばったり会いましたら、ぐるりに人がいっぱいいるそういう往来のまん中でその社長さんに「あなたトイレへ行くんやったら行くで、わてさそってくれたらいいのに(爆笑)。ほなわてかて一ぺん社長さんに連れてもろてトイレ行って、どんなとこや一ぺん見ときたいのに」と(笑声)。

そのときにはその芸者さんは、トイレってのは近く最近にできたレストランの名前やと思て(笑声)。だから社長さんが、ちょうどたずねて行ったときはお昼めしの前後だったんで、てっきり昼めし食べに行くと、それだからトイレへ連れてってくれと。そういう意味で言うて、それ以来「トイレ芸者」ってんで今日まで名前とエピソードが残っております。

今日では放送局その他テレビ、ラジオ、あの辺のところでは便所のことを「録音する」と、そのように言っております。これもやはり時代の流れで、現在では録音という、あのテレビ、ラジオであれるのは、要

するに後に出すんですけど、そのときに音楽なり、せりふなり音を入れるんで、オトイレ（音入れ）というわけで（笑声）、オトイレは便所、それで「オトイレ」と言わないで「録音」と言うのがいまではそういう一部の流行語になっておる。ですから仕事の最中に「どこ行くのん」という場合に「ちょっと録音に」「ああ録音ですか」、そいでわかる。考えますとことばってものも絶えず時代に沿うて変わってきております。

## 脳膜炎よさようなら

わたしらそういう意味合いでこの60年、70年振り返ってみますと、大阪の生活ってものは非常にうそのように現在ではりっぱに便利になりましたが、ことばの点でもそういう便利になるにつれていんな古いことば、古い言い回し、古い生活様式、そういうものが消え、それに対応した新しいことば、新しい言い回し、楽しい言い回ししてのができてきております。40年近く漫才の仕事を続けてきておりますが、そういう中でもだんだんと消えて行ったことばがずいぶんたくさんございます。

たとえば昭和の初めごろ、中ごろくらいまでは漫才の舞台に一番よく出てくることばっていいものは、何か相手とがぼけたことを言う、間の抜けのことを言う。そういうときに「おまえはアホやな」と言うとき片やのほうが「おれ小さいときに脳膜炎わずろうたんや」と。現在では脳膜炎てことば使ってる漫才屋さん一人もおりません。知らない間に脳膜炎てものわずろうてる人がほとんどなくなってきたんじゃないかと。そういう面でも非常に時代の移り変わり、みんなの生活ぶりってのが相当変わってきた、非常に変わってきた。そういうことが使ってることばの面からも言えるんじゃないかと思えます。

戦後、娘たちがまだ小さい時分わたしのてて親とそれからわたしの娘、つまり孫とおじいさんが一緒に食事をするときに、ちょいちょいともめて、私仲裁に困ったことがございます。それは何かと申しますと、私原稿を書きますとき、戦前からそうですが、ずっと鉛筆で書いておりますんで、絶えず手がよごれておりますんで、いろんな場合一日にとにかく10回くらい絶えず手を洗っており、娘たちも手だけは絶えず洗っており、そして食事をする、あるいはもの食べる。

おじいさんが手洗わないで食卓へすわるんで、孫がそれ見つけまして、「おじいさん、手洗うておいで」と孫が言うわけなんです。するとおじいさんのほう

は、「きょうはきたないものさわってへんから手きれいや」と。ほんで娘たちが、「きたないものさわってない手きれいやいうても、目に見えんばい菌が手にいっぱいいついてる、おじいさん一緒に手洗ってらっしゃい。そやなかったら一緒に御飯食べへん」と、子供が強迫するわけなんです。するとおじいさんは、「きれいや、きょうは何もしてへん、大丈夫や」と頑強にがんばる。孫とおじいさんの間でえらいいさかい、争いになりまして、争いの末にはおじいさんが孫の言い分に負けまして、負けた末は年がいかもなくほんきになって、「おじいさんはこれ70何年若いときから手洗わんと御飯たべてるが、病気になることばはない（笑声）。そんなことばはいまの学校で教えてることで、そんなことばは正しいない」と、えらいけんか腰。

それからはおじいさんが仏壇におまんじゅうを供えます、そのおまんじゅうのお下がりを孫にやりますと、孫が食べないんです。あげくの果てはわたしの家内にわたしのてて親が「おまえが娘たちに、わしのものやっても食べたらいかん言うてんのんと違うか」と（笑声）。えらいもめまして、ほんで家内がわたしのほうに、「おじいさんこう言うておこってんねんけども、子供たちはおじいさんのもの食べへん。食べへんのはあれ手洗えへん、不潔やと言うて食べへん。どないしましょう」と。どないって、これわたしも長年世話になってるてて親に対して言いようないんで（爆笑）ほんで、「おじいさん、孫にものやるときは、おじいさんのくれるものぼくはそのまま食べるけども、孫にやるときには手洗うかっこうだけでもしてほしい。せやないと孫は何にも食べしまへんで」と。ほんでまあてて親もしようない、いまの若い子は学校で何教えとんねん（笑声）、ろくなこと教えへん、と文句言いながらおじいさんも手洗うようになりました。

## 笑顔で叱る大阪弁

大阪ではいろんな場合にしかるっていいですか、そういう場合でも、こわい顔してしからない。笑い顔でしかるっていいですか、まあたとえばわたしらの小さい時分にしくじりをする、おねしょをする。そういう場合でも母親は子供のわたしたちをしかる場合でも、こわい顔してはしからない。標準語、東京弁、そんなへいきますと一番乱暴なことばですけども「ばかなやろうだ」「ばかなガキだ」と、そのように東京では言えます。ところが大阪では同じように「アホなやっちゃ」「アホなガキや」とは本来そのようにおこらない。わたしらでも子供の時分、いまだに覚えておりま

すが、そういうしくじりをしました場合、母親が子供をたしなめるたしなめ方ってのは「あんた何やねん、あんたにも似合わんアホなことして」と。行為をとがめても相手全部をきめつけない。「あんた何やねん、あんたに似合わんアホなことして。あんたふだん賢いやないか、そやのにこれ賢くないな、アホなことして」と。

ですから言われたこちらのほうも、「そや、自分賢いのになんでこんな賢くないことしたんやな」と（笑声）、すなおに入り、それで「お母さんこれから気をつけます」と、なごやかに笑顔でしかるっていいですか、そういうふうの口から口へ、耳に入りやすい、口に言いやすい、そういう形の話しことばですべての生活していく中に必要だと思われる事柄が絶えず今日まで伝えられてきてる。わたしらそれを覚え、知らない間にそれが生活の中の躰として身につけております。

これは御承知のように皆さん方もお聞きになり、あるいは言われたことおありだと思いますけども、たとえば御飯食べる。御飯食べたあとですぐゴロツと横になる。そういうときにはだれかが親が、母親にしても「御飯食べてすぐ横になったら牛になりませ」と、そのように言います。あれが笑顔でしかる言い方なんで。御飯食べてゴロツと横になる、「何です、行儀の悪い」とは頭から文句を言わない。ゴロツと横になるのはかまわないけども、牛になって角はえてもお母さん知りまへんど、責任を子供に転嫁しますから、子供にするとゴロツと横になった、それをとがめられたんじゃない、牛になって角がはえませと、で角はえたらかなわんから子供は自発的に起きてるわけです。

これが3回4回5回と絶えずそのたびに言われます

と、6回目くらいには寝かけても、あっそや、ゴロツと横に寝たら牛になって角がはえる、角はえたらかなわん、で自分で起きてしまう。そして今度お友だちがゴロツと横に寝ると、「アツ横に寝たら牛になんぞノ」と、そのようにしてそういうお行儀が身につけていくといいますが、そういう口から口へのことばの形で寝てもものが身につけております。

## 酒がついたら煙草吹け

昔は着物なんか着てる時代にあぶら垢ついてる、それはどして落としたらええかと。そういうなんでも全部うたで、ゝあぶら垢ついた着物は熱湯に塩ひと握りさましてぞ洗う、と、そういうことを年寄りが絶えず言っております。熱湯に塩ひと握り、それさめたらそれで洗ったらあぶら垢がとれるとか。それからこの間もわたし、わたしの年少の友人がやってるんでそんなところで聞いたんや」言うたら「ええ……」って笑ってましたけども、ゝ酒のしみついた着物はいち早くたばこの煙を吹きかくるべし、と。それがいくかいかないか、わたしよく知りませんが、やるだけはやりますけども、この間若い連中がやったんでそれ言うたら、知らん間に覚えてそいで思い出して一生懸命たばこを吸うてフーと洋服にかけてるんで、聞いたら、そういうふうにはゝ酒のしみついた衣服はいち早くたばこの煙吹きかくるべし、と、そういうふうなんが知らん間にいつも年寄りがおうちん中で言うてる、そういう形でいるんなのが今日まで伝えられてきた。

ついしばらく前までは、何かの場合、ゝ畳の下には新聞紙敷け、そういうことが言われておりました。大



掃除のときには、したらあと新聞紙敷いとくと、新聞紙の油のにおいで虫が近寄らんとか、そういう新聞紙の使い方、効用ってのもある時代には日常生活の中でお互いに絶えず言い合ってそれを生かしてきた。

現在ではもうすでにそういう意味では衛生の側から無理やりに畳の下へ敷くのには新聞紙でなくてももっと別のいい方法もある、それに関するどうしたらええかという、そういうことが案外日常生活の中では、話しことばとしてはそういうふうにわれわれの中にできていない、伝わってない、こんなのがあればもっとおもしろい、もっといいんじゃないか。昔はそういうふうにいろんなものが無数にあったんじゃないかと思えます。これから先もわれわれの生活ってものは1日ごとになりっぱになっていくんじゃないか、と。

## 楽しい大阪ことばを

考えますと、日ごと日ごとにこの70年見ましても、大阪が住みよく便利に、生活がりっぱになってき、みんなの力でますます楽しい大阪になってきておる。なってきたおるについて、やはりある意味で言えば物質生活の面では非常にりっぱになっておりますが、それを補う精神面がまだもう一息足りないというよりも、これからそういう点を昔の大阪流の商は笑なりにまさるとも劣らない話しことばの言い回し、言い方の形で口から口へ、耳に入りやすく口に言いやすい形で、いろんなわれわれも実行し、そのことによって町のりっぱさを守る、そういうことが日常生活にもっと徹底しなきゃいけないんじゃないか。私はそういう気がいたします。

現在でもそういうふうになりっぱな町になりながら、見ておりますと道でつば吐く人が一ぱいある。ああいうつば何かにしても、つば吐きゃいけないという、いけないというよりも吐くのんやめようという、何かそういうおもしろい言い回し、それがあっていいんじゃないか、それがやはりそういうつばの面では全然何にもなしに、ついついだれでもが平気じゃないが、まず平気でつばを吐く。あるいは立ち小便にしてもみんながやってる。そして町をきれいでない反対のほうに持っていくそういう面がある。

そういう面をできるだけ防ぐわれわれ日常生活で楽しいお互いの耳に入ることば、ことばが目に見えませんが、手足以上に生きるそういうものがわれわれお互いにしなきゃいけない、やらないといけないんじゃないか、そういう気がいたします。

わたしは大阪が好きで、よく言われますけども、愛

するとか愛国とか愛市、そういうこと何かってことをこれまでもたびたび聞かれたことがございますけども、まあ私はいろんな言い方あると思えますけども、私は私流に、そういう愛するということはごく簡単ごく単純なことで、自分たちの両親なり先人たちが大阪に住んで、自分たちの住みよい町に努力してきてくれた。自分もここに70年近く住んでる。これから先自分たちの子供たちあるいは若い人たちも住む、その土地だけに、できるだけ住みよいように自分の生きてる間相協力してやっていこう。何よりも自分が足を踏まえてこの土地をいつくしむ心、これが愛する心じゃないか。私そのように機会あるごとに言っております。

わたしは大阪が好きで、きょうまで来、振り返ってみると、大阪の町ってのは非常に楽しい、いい、そういう気がいたします。そして私が漫才の仕事をし、きょうまでの大阪が何よりも、高いは笑いである、商は笑なり、そういう精神を一番の中心にして、できるだけともに笑う話しことばの形できょうまで楽しく来た。自分も仕事それに携ってきております。これから先、生活が便利になる、りっぱになるについては、よりりっぱに、より便利な、より楽しいそれになっていくにはもう一息それを裏づける、われわれのことばを通じてのそういう精神面の健康さ、そういうものが私必要ではないかと思えます。

私やはりそういう意味で家庭うたと申しますか小さい時分からきょうまでも絶えず言われ続けてき、いまではときどきは言う身分側になっておりますけども、そういう時分に聞いたやはり家庭うたにございますが、手や足のよごれは常に洗えども心の垢を洗う人なしと。わたしこのことばが好きで、われわれは何よりも心の垢を絶えずお互いに洗う、それをできるだけ洗えるそういう道具、方法を、言い回し、たとえのことばでできるだけ生かし、広めていきたい。

こういうことがわたしたちの生活してる大阪人の一番大事な役目じゃないか。そしてそれもむづかしい役目じゃなしに、一番楽しい役目じゃないか。そういう気がいたします。わたしは大阪が好きで、これからも大阪がますます便利になる。便利になるには便利になるそれに応じて裏づけたそういうふうのいろんなことば、言い回し、私の仕事の側から協力して楽しいことばづかい、楽しい話しことば、そういうものにどんどんこれからも勉強していきたい、そのように思っております。

(公衆衛生大阪大会の特別講演を編集部でまとめました)